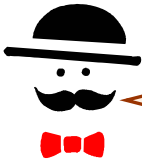


特別支援教育の推進が不登校の予防に

不登校の質が変わってきている！？



不登校の子どもたちの中には、何らかの発達障害やその傾向があり、学習面や行動面での困難を抱えている子が多数いることが分かってきました。「二次障害としての不登校」にならないためには、特別支援教育への理解と実践が欠かせなくなっています。

知的な遅れやLD, ADHD, 高機能自閉症などの発達障害がある子や、その周辺の子にとって、学習面や行動面で人並みにこなすのは極めて大変なことです。しかし、見た目にはハンディがあることが分かりにくいために、教師側からはやる気のなさや努力不足、わがまま、ときには親の養育態度など家庭の問題として誤解されやすく、教師からの注意や叱責、仲間からの非難やからかいを受けやすいといった問題があります。

また、こうした子が頻繁にトラブルを起こして周囲が迷惑する場合もあれば、反対に周囲の子の欲求不満のはけ口として、いじめのターゲットとなってしまうこともあります。

学校がストレスに満ちた場になってしまうと、最終的には不登校という形で学校から退却してしまうことが起こりやすく、十分な注意が必要です。

そうした子は、不登校の中にどれくらいいるの？

平成16年度に、年間30日以上欠席の不登校児童生徒のうち、何らかの発達障害を感じさせる特徴が見られる子の割合(教師回答)

小学生57%(113人中64人)・中学生49%(433人中212人)

本市教育センターの実態調査より(平成17年3月実施)
全体の不登校児童生徒数は本調査の報告数であり未確定値

通常学級の児童生徒全体について行った国の調査結果6.3%に比べて、けた違いに多いケロ



その内訳

- 欠席による学習の遅れを差し引いても、知的発達に遅れが認められ、全体的な学力が極端に低い、または低いと思われる。
- 知的発達の遅れは認められないものの(1)、欠席による学習の遅れを差し引いても、学習面で著しい困難を示す(2)、または示すと思われる。
- 知的発達の遅れは認められないものの、欠席による学習の遅れを差し引いても、行動面で著しい困難を示す(3)、または示すと思われる。
- 知的発達の遅れは認められないものの、欠席による学習の遅れを差し引いても、学習面と行動面ともに著しい困難を示す、または示すと思われる。

| | 小学生 | 中学生 | 全体 |
|---|-------|-------|-------|
| 1 | 11.5% | 9.7% | 10.1% |
| 2 | 19.5% | 15.9% | 16.7% |
| 3 | 18.6% | 11.8% | 13.2% |
| 4 | 7.1% | 11.5% | 10.6% |
| 計 | 56.6% | 49.0% | 50.5% |

- 「知的発達の遅れは認められない」とは、国語、算数(数学)、理科、社会、生活、英語のうち、1つ以上の教科において、学年相当の普通程度の学力があることをいう。
- 「学習面で著しい困難を示す」とは、「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」のうちの、一つあるいは複数で著しい困難を示し、国語と算数・数学のどちらか一方もしくは双方の教科において、2学年以上(ただし小学1,2年においては1学年以上)の遅れが認められることをいう。
- 「行動面で著しい困難を示す」とは、「不注意」の問題、「多動性-衝動性」の問題、「対人関係やこだわり等」の問題の一つもしくは複数で、著しい困難を示す場合をさす。

裏面へ

さて、不登校問題を考えるとき、忘れてならないのは「個別性」の視点です。

不登校が多いという事実は、現在の学校教育が抱える大きな問題ですが、個人に目を向けたときには、不登校という状態が、その子の心の成長にとって必要な場合もあるものです。



しかし、発達障害とその周辺の子の不登校では、**劣等感**や**疎外感**、教師・仲間への**恐怖感**や**敵対心**が根付きやすく、その場合、その後の人格形成に暗い影を落とすことが心配されます。

また、柔軟に思考することに困難を抱え、こだわりが強い子の場合は、“学校には行かない”という自ら定めたルールから抜け出せなくなり、不登校が長期化することもあります。

不登校の始まりは、こんなところから

例1 Aさんは、授業中ほとんど皆と同じ活動をせず、好きな本を読んでいたりと、教室内をウロウロしては隅の方で小さくくまっていたりすることが多い。席に着いてきちんとやるよう先生に注意されたり、皆で音読や歌を歌ったりするときは、耳をふさいで教室を飛び出してしまうこともあり、先生はその都度Aさんを追いかけ、探し出せば、嫌がるAさんの手を引いて教室に連れ戻す。しかし最近では、家に帰ってしまうことまであり、「学校はやだ、行きたくない」と泣いて母親にしがみつくと。

集団適応困難

適応行動の要求

精神的苦痛(不快感)

不登校

例2 Bさんは書くことがとても苦手。ノートを最後まで取らずに先生から注意を受ける毎日。ようやく書いた文字はお世辞にも上手とは言えず、間違いも目立つ。先生は、母親に対して、Bさんの学習の面倒を見るように連絡。Bさんは、ノート1ページの漢字練習の宿題もなかなか進まず、あまりの遅さに母親は苛立ち、つきつく叱ってしまう。Bさんは眠い目をこすりながらペソをかき出す始末で、親子共々心身ともに疲れ果てて一日が終わる。やがてBさんは体の不調を訴えて登校を渋り出す。

学習困難(書字)

課題の負担過重

精神的苦痛(疲労感)

不登校

例3 Cさんは、物知り博士と呼ばれるほど知識が豊富な子。しかし、一方的で理屈っぽく、生意気な感じのする話方や、何やらブツブツと独り言が目立ち、周囲からは疎まれ、からかいや嫌がらせを受けることが多い。クラスの子の中には、物を奪って返さない、隠したり落書きをしたりする子までいる。そのときのCさんの慌てぶりが周囲には愉快らしく、教師の見えないところでいじめは蔓延化している。最近Cさんは、家で「教室が怖い」「学校なんかもうやめる」と言い張り、親に当たるようになっている。

独特な話し方・反応

いじめの被害

精神的苦痛(恐怖感)

不登校

例4 Dさんは、ちょっと気に障ると瞬時に目つきが変わり、暴力を振るったり、物を投げつけたりする。時には何が原因か周囲の子さえ分からないこともある。パニックを起こすと、先生はその都度母親に連絡し、Dさんを連れて帰ってもらっている。母親が到着する頃には落ち着きを取り戻しているDさんだが、母親の姿を見るとまた興奮し、「帰れ！おれは帰らない！」と怒鳴り散らす。そんなことを繰り返すうちに、Dさんは学校に来なくなってしまった。家では「みんなオレを邪魔者扱いする」「俺なんかいない方がいいんだ」と言って、ゲームばかりしている。

パニック(興奮・暴力)

不本意な帰宅

精神的苦痛(疎外感)

不登校

不登校予防のための対応の鍵は？



「特別支援教育豆だより」には、問題ごとに詳しく書いてあるよーん

その子が体験している世界を、その子の特性に基づいてイメージしてみる。学習面・行動面での**要求水準を下げる**。介入すべき行動レベルを見直す。行動の仕方が具体的に分かりやすい**簡潔な話し方**と**視覚提示**を工夫する。校内に気持ちを落ち着かせるための**避難場所となるスペース**を確保する。教室に入れない子には**別室登校の場**を確保し、学習・作業課題を与える。パニックがおさまれば学校生活は継続。**パニックに至った流れを検証**する。**担任へのサポート体制**として、校内のマンパワーの活用をシステム化する。学校内外の**個別・少人数指導の場**の活用について、保護者とともに検討する。